

## 『熊坂』を謡う

新田由紀子

謡曲の会の「謡初め」で『熊坂』のシテ役を仰せつかつた。ご存じ大盗賊の熊坂長範である。フキヤツレではない主役のいかつい髭面の首領だ。

なんで、私が『熊坂』を。常日頃、師から「もっと声を太く、大きく、思いっきり」と言わわれているこの新米が盗賊の頭役で謡うのか。どうも気が乗らはず、稽古もしないでほつたらかしていた。

ひと月ほど前になると謡初めの番組が印刷されてきた。見ると、フキ役（相手役）は会の重鎮にして師範級のNさんが勤めてくださる。それなら安心の大船。フキは謡い語りも多く、筋を受けて運んでくれる。シテはその神輿の上に乗って結構なことを言つていればよいのではないか、と一人合点した。

『熊坂』とは言つてみればチャンバラ劇だ。ある時（時代不詳）、都の僧が東国修行の途中、青野ヶ原赤坂宿（大垣市あたり）にさしかかると、里の僧（化身）が現れて回向を請うが、堂内には拝むべき仏像もなく、大長刀に兵具・鉄棒が並んでいるばかり。これは山賊・夜盗の襲撃から里人を守るために里の僧は言うと、堂宇と共にいざともなくかき消える。草叢で夜を明かした旅僧の前に長範の亡靈が現れ、こゝで息絶えた次第を陰々と語り出す。

豪勢な商人金売り吉次一行は、奥州へ逃れる牛若丸（義経）を伴い赤坂の宿に着く。遊女をあげての酒宴の果てに一行が寝入ると、長範の指図の下、七十人の盗賊集団が襲いかかる。牛若殿とハ夢にも知らず、運の盡きぬる盗人等。然れども牛若子少し恐る々氣色なく、獅子奮迅虎乱入飛鳥の翔りて攻め戦へば。さしもの趙範重手を負ひて弱りゆき此の松が根の苔の露霜と消えし昔の物語。

謡つてみると、軽々と翻つて小太刀突つ込む牛若丸と大盗賊の丁々発止の斬り合い調子にすっかり魅了された。勇猛で歯切れの良い曲である。これを謡初めに向けてしつかり稽古すれば、このぼんくら生徒の欠点が少しは解消されようとの、ありがたい師の「指南」であった。